



ASCM
COMMUNITY
JAPAN

THE SUPPLY CHAINER MAGAZINE

SCOR®特集

特集
1

「AC」EDGEに寄せて」
-ピーター・ボルストフ

特集
2

SCOR®で学ぶ世界標準の
サプライチェーン設計



Concourse C
Gates C1-C32



Gates B9-B24

Baggage Claim
Service Animal Relief Area



STARBUCKS COFFEE



Concourse C
Gates C1-C32



Gates B9-B24

特別号



APICS
CSCP
CERTIFIED SUPPLY CHAIN PROFESSIONAL

The APICS Certified Supply Chain Professional (CSCP) provides a comprehensive body of knowledge, best practices and standards for those in supply chain.

APICS CSCP designees gain the skills to effectively manage global supply chain activities that involve suppliers, plants, distributors and customers located around the world. CSCP serves the needs of both professionals and employers by keeping you and your organization more competitive in today's economy.

ASCM ASSOCIATION FOR
SUPPLY CHAIN
MANAGEMENT



日本生産性本部
JAPAN PRODUCTIVITY CENTER



**ASCM
COMMUNITY
JAPAN**



ASCM COMMUNITY JAPAN「ACJ EDGE」に寄せて：

ピーター・ボルストフ Peter Bolstorff CSCP, CTSC, SCOR-P

※日本語訳：ASCM COMMUNITY JAPAN 調査研究委員会

ASCM COMMUNITY JAPAN では 2025 年 5 月開催の「ACJ EDGE」においてサプライチェーンの構造解析・性能評価のフレームワーク Supply Chain Operations Reference (SCOR) に注目した。本稿は SCOR の第一人者であるピーター・ボルストフ氏による同イベントでの講演内容の日本語訳である。

皆さん、こんばんは！ピーター・ボルストフです。この素晴らしいイベントを主催してくださった行本理事長と、ACJ の皆様、心から感謝申し上げます。本日は、SCOR (Supply Chain Operations Reference)、サプライチェーンの卓越性、そしてデジタルトランスフォーメーションと AI の交差点における新しい応用についてお話できることを楽しみにしています。正直に申し上げますと、日本の皆様の技術レベルは非常に高く、少々緊張しております。

私は 1995 年、3M のスピンオフ企業であるイメージジョンに在籍していた際、PRTM とベンチマーキングに取り組む中で初めて SCOR に出会いました。その後、1996 年に SCOR は新設された業界団体「Supply Chain Council (SCC)」を通じて初めて公に発表されました。これは、AMR と PRTM の協力によるもので、イメージジョンのチームは SCC の発足イベントに参加しました。

1996 年から 1998 年にかけて、私たちのセンター・オブ・エクセレンス (COE) は、SCOR、シックスシグマの DMAIC、そしてプロジェクトマネジメントを独自に組み合わせた実装ロードマップを策定し、サプライチェーンのパフォーマンスを迅速に改善しました。当時、私はサプライチェーン計画のグローバルプロセスオーナーとして、S&OP (販売・業務計画)、マスタースケジューリング、DRP (分配要求計画)、MRP (資材所要量計画)、そして有限スケジューリングを担当していました。

また、私はボランティア活動として「計画」と「統合」委員会の議長を務め、SCC の理事を務め、初の SCOR ワークショップのコンテンツを開発し、多くの SCC の年次会議で講演を行いました。理事として活動していた間に、日本支部の SCC メンバーである垣見さん、阿部さん、三枝さんと初めてお会いしました。

『Supply Chain Excellence: A Handbook for Dramatic Improvement Using the SCOR Model』は、2002 年に初版が刊行され、その後 2007 年に第 2 版、2013 年に第 3 版が出版されました。初版の直後、日本ビジネスクリエイト (JBC) より本書の日本語版が出版され、これは 6 か国語での翻訳の最初の一冊でした。



『サプライチェーン・エクセレンス：SCOR モデルによる改革活動ハンドブック (2005)』

ピーター ボルストフ (著), ロバート ローゼンバウム (著), 日本ビジネスクリエイト (訳)

これまでに3度訪日し、SCC日本支部や企業の皆様とともに、SCOR実装の経験を共有させていただいたことを光栄に思っています。ASCMコミュニティジャパンの高井英造先生と行本顕理事長、ストラテジック・サプライチェーン・フォーラム・ジャパン（SSFJ）の園川先生、そして日本生産性本部（JPC）の深谷健一郎さんにも、大変お世話になりました。皆様の献身と革新によって、日本はSCOR（および関連モデル）を活用し、プロセスを設計し、サプライチェーンのパフォーマンスを向上させるグローバルな卓越性の中心地へと発展しました。

2002年から2012年の間、私は幸運にも26のクライアントとともに90のサプライチェーン改善プログラムを指導する機会に恵まれました。SCORベースのプログラムは、累積で2億200万ドルのコスト削減効果を13.5億ドルの収益規模で実現しました。プロジェクトを開始する動機は、2013年のリストからほとんど変わっていません。2024年のトップ5は以下の通りです。

1. サプライチェーンプロセスの標準化によるAIガバナンスの向上、技術活用の強化、トランスフォーメーションの効果促進
2. S&OP（またはIBP）を真のオーケストレーションレベルへ引き上げる
3. サプライチェーン戦略を株主指標、持続可能性の取り組み、循環型経済の機会と整合させる
4. 機敏でレジリエントかつ透明性の高いエンドツーエンドのサプライチェーンへの継続的投資
5. アナログからデジタル、ジェネレーティブAI（GenAI）、そして次の革新へと加速する文化変革

現在、デジタル技術がビジネスモデルにますます大きな影響を与えています。しかし、過去5年間のデジタルトランスフォーメーションのROI（投資収益率）は芳しくありません。依然としてデータ品質の低さ、エンドツーエンドの可視性の欠如、システム活用の不十分さといった課題に直面しています。

ChatGPTの登場、AI技術の進展、そしてAIエージェントの急速な拡大によって、サプライチェーンの専門家は今後2年で自身の業務がどう変化するかを模索し、企業は自動化と生産性向上のプレッシャーに直面しています。

SCORモデルの成功は、その普及期において「プロモーション」ではなく「魅力」によるものでした。魅力とは、パフォーマンスベンチマーキングのシンプルさ、プロセス最適化によるギャップ解消、そしてシステム活用による持続的な改善を指します。

私たちの経験からも、SCORのような標準的なフレームワークを活用することで、ROIをシンプルかつ迅速に達成できることがわかっています。皆さんとともに学びながら、皆さんの組織の成果につながる活動ができることを楽しみにしています。



Peter Bolstorff CSCP, CTSC, SCOR-P

Successful Entrepreneur, Supply Chain Management and Operations executive with more than 30 years of experience. Proven ability to lead through influence using exceptional communication, coaching, management, and motivational skills. Demonstrated ROI on over 150 SCOR based projects.

SCOR®で学ぶ 世界標準のサプライチェーン設計

超・入門編

- 第1回 サプライチェーン参照モデルの刷新
- 「土管」から進化した世界観-
- 第2回 サプライチェーンの「性能評価」
- 「良い」サプライチェーンとは-
- 第3回 サプライチェーンの「構造解析」
- サプライチェーンの「変革」を考える-

本特集は公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会の許可を得て同協会の機関誌「Logistics Systems」に掲載された記事を転載したものです。各記事の初出は下記の通りとなります：

第1回：2024年秋号

第2回：2025年新年号

第3回：2025年春号

[第1回]

サプライチェーン参照モデルの刷新

～「土管」から進化した世界観～

行本 顕 (ゆきもと けん)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 理事長 / IDP, CPIM-F, CSCP-F, CLTD-F

高井 慎平 (たかい しんぺい)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 調査研究委員 / SCOR-P, CPIM, CSCP, CLTD

SCOR®で描くサプライチェーンの構造と性能

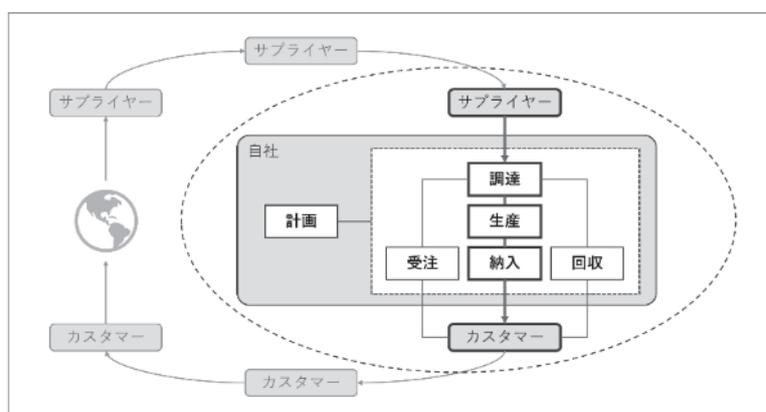
「全体最適」という言葉は、サプライチェーン・マネジメント (SCM) の文脈でよく見かけるキーワードです。この言葉の響きは、目的とも手段とも取れる謎めいたものであり、時に私たちを幻惑の世界へと誘います。この「全体」とは何を指すのでしょうか。また、「最適」とは誰にとっての評価なのでしょうか。本連載では、この素朴な疑問を念頭に置きつつ、サプライチェーンの構造解析と性能評価の標準的手法であるサプライチェーン・オペレーションズ・リファレンス (Supply Chain Operations Reference, SCOR®) モデルについて解説します。

サプライチェーンとは、モノ作りやモノ運びの連鎖を通じたマテリアルフローを一種の「エコシステム」とみなす概念です¹⁾。しかし、これを構成する個々の要素としての諸活動は多岐にわたり、単一の事象を指す用語が当事者間で様ではないことが常です。これを適切な解像度に抽象化して定義し、要素間の関係性・構造を描くためのメソドロジーとして多くの実務家・企業に支持され、デファクト標準となっているのが本連載のテーマであるSCOR®モデルです。

プロセス参照モデルによる「標準化」と「抽象化」

あるサプライチェーンの構造を描き出そうとするとき、その特徴を遺漏なく捉え、かつ一見して理解できる程度に抽象化するための必須要素として何を想定すべきでしょうか。SCOR®は、「調達」「生産」「納入」「受注」「回収」およびこれらについての「計画」の6種類の活動を最も抽象度の高い構成要素として想定します²⁾。これらは「レベル1プロセス」と呼ばれ、抽象的であるが故に汎企業的なサプライチェーン構造を広く視野に捉える際に用いることがユーザーには期待されています (図表1)。

他方、各社各様の個別具体的な活動は「レベル4プロセス」として整理され、参照モデルに沿って再



図表1 近視眼的な世界観ではサプライチェーンは「土管」に見える

定義されます。この「標準化」によりサプライチェーン上の各種活動は、SCOR[®]が用意するレベル1～3の標準表現を用いた抽象化／具体化の概念操作が自在に行えるようになります。すなわち、サプライチェーンの構造解析やあるべき姿についての思考実験を行うことが容易になるのです。

SCOR[®]がデファクト標準となった経緯

1950年代頃に遡るといわれるSCMの進化の歴史において、SCOR[®]の登場時期は比較的新しく、米国で最初のバージョンが公開されたのは1996年とされます。初期のSCOR[®]モデル開発を主導したのは、米国のSCM推進団体サプライチェーン協議会(Supply Chain Council, SCC)でした。その後、SCCは2014年に同じく米国のSCM推進団体であるASCM (IHIPICS)と合併し、SCOR[®]の開発・普及促進体制を移管する形で現在に至っています³⁾。

SCOR[®]はデファクト標準としての性質から継続的なアップデートが想定されており、ASCMに移管された後の2019年にリリースされたv.13では大幅な概念拡張が行われました。特に現代的なSCM観が重視されることになり、従来のメソドロジーを踏襲し



図表2
SCOR[®]-DS用語を採録したSCM用語辞典を手にするボルストフ氏と筆者(行本)

つつ、前提とする世界観がいわゆる「土管型」から「循環型」へと更新されました。また、v.13以降は「SCOR[®]-Digital Standard (SCOR[®]-DS)」の呼称が用いられており、誰もが参照できるオープンソースとしてASCMのウェブサイト上に公開されています⁴⁾。

日本国内では、2005年に刊行されたSCOR[®]推進の旗手ピーター＝ボルストフ氏の著書「サ

プライチェーン・エクセレンス」の訳書を通じてSCOR[®]のメソドロジーが知られるようになりました。SCOR[®] v.5をベースとする同書と現在のSCOR[®] v.14とのターミノロジーの変化については、2023年に刊行されたASCMディクショナリー第17版の日英対訳版において200超の用語を追加・更新する形で一定の補完が試みられています(図表2)⁵⁾。

SCOR[®]を習得するための実務家教育の環境

2024年現在、SCOR[®]を体系的に学ぶための手段として、前出のボルストフ氏の手によるCTSC (Certified in Transformation for Supply Chain) プログラムがASCMより提供されています。日本国内では、ASCM教育パートナーである公益財団法人日本生産性本部および一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPANがローカライゼーションを含む普及促進活動を行っています。その教育プログラムの一部は公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会において「『超』入門！戦略的サプライチェーン設計セミナー」として実施されています。

(連載第2回へ続く)

【参考文献】 URLは2024年8月31日時点

- 1) 山本圭一・水谷慎志・行本顕「基礎から学べる！世界標準のSCM教本」
- 2) 行本顕・高井慎平・日岐俊仁「基礎から学べる！世界標準のSCM用語解説 第2回「SCOR-DS」「CSCP」」 Logistics Systems 2023年秋号／なお、概念的にはさらに上位(レベル0)の要素として「オーケストレート」がある。
- 3) Peter Bolstorff “20 Years of SCOR: Reflections on Relevancy and the Road Ahead” <https://www.ascm.org/ascm-insights/20-years-of-scor-reflections-on-relevancy-and-the-road-ahead/>
- 4) ASCM “SCOR-Digital Standard” <https://scor.ascm.org/processes/introduction>
- 5) ASCM 著/ ASCM Community Japan, 日本生産性本部 コンサルティング部 訳「サプライチェーンマネジメント辞典 ASCMディクショナリー [第17版]」

[第2回]

サプライチェーンの「性能評価」

～「良い」サプライチェーンとは～

行本 顕 (ゆきもと けん)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 理事長 / IDP, CPIM-F, CSCP-F, CLTD-F

高井 慎平 (たかい しんぺい)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 調査研究委員 / SCOR-P, CPIM, CSCP, CLTD

「良い」サプライチェーンは立場によって異なる

アマプラの略称で知られる有料の会員制プログラム「amazon prime」をECの雄アマゾン社が開始して今年で20年が経ちます。同社の本国であり年間売上上の6割超を占める米国においてこのプログラムが取り扱う商品点数は約3億点、うち数千万点の商品を翌日または当日に配送できるといいます。2005年のプログラム開始時に比べ20倍の点数の商品を2倍の速度で届けられるように発展したという経緯¹⁾からは、多くの利用者が同社のサプライチェーンの「速さ」に価値を感じ、選好している様子が覗えます。

もっとも、サプライチェーンの性能の良し悪しは評価者の立場によって異なります。すぐに商品の届くサプライチェーンはカスタマーにとって「良い」仕組みといえそうですが、サプライヤーの立場からすればその性能を賄うコストの多寡も関心事となります。さらに、エコシステムとしてのサプライチェーン自体の維持ができなければ誰も中長期的な時間軸ではハッピーにはならないことでしょう。このような、立場によって異なる性能評価についてSCOR[®]は「カスタマー」「自社（サプライヤー）」「エコシステム」の観点より整理しています。

カスタマーにとっての「良い」サプライチェーン

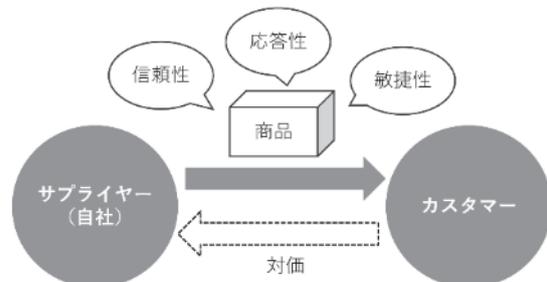
SCOR[®]では顧客志向の評価指標として以下の3つ

を挙げています。

- ①信頼性：パーフェクトオーダー率に代表されるように、製品・サービスを納期通りに、注文通りの数量で、正確な書類（納品書・請求書等）とともに納品できる能力等が含まれる。
- ②応答性：顧客から注文を受けてから納入するまでの迅速さ。納入リードタイムに限らず、調達や製造等に掛かるリードタイムも含まれる。
- ③敏捷性：需要変動、サプライヤーやパートナー企業の倒産、自然災害、政治・経済的混乱等、計画外の外的要因への対応能力。

SCOR[®]では、これらを統合して「レジリエンス指標」として整理しています²⁾（図表1）。

カスタマーが価値を感じて選好する要素は一樣ではありませんが、もしもいつ注文をしても商品が正確かつ迅速に届き、そのパフォーマンスがいかな



図表1 サプライチェーンのレジリエンスは提供価値の一種でもある

る状況においても維持されているような供給体制ならば、あらゆるカスタマーにとって最高のサプライチェーンだと言えるでしょう。

サプライヤーにとっての「良い」サプライチェーン

もっとも、レジリエンスを含む顧客への提供価値を形成するサプライヤーの諸活動は、大なり小なり経営資源を用いて行われます。いかにカスタマーの欲するところを満たす製品やサービスであってもこれを実現するために投じる経営資源が過大であったならば自社の得べき価値が残りません。サプライヤーの立場からみた「良い」サプライチェーンとは、自社が投じた経営資源がカスタマーに対する価値形成・価値提供に寄与すると同時に、自社もしっかりと利益を得られる仕組みを伴うものといえるでしょう。

ROIC（投下資本利益率）は、投下資本回転率と売上高利益率を同時に把握することができる点でサプライヤーの観点からのサプライチェーン性能評価に適した指標とされています³⁾（図表2）。

顧客価値

売上

投下資本

利益

売上

$$\text{ROIC} = \frac{\text{売上}}{\text{投下資本}} \times \frac{\text{利益}}{\text{売上}}$$

図表2 サプライチェーンへの投資は顧客・自社双方にとっての価値を形成することが望ましい

ROICそのものは投下資本に対する利益の割合として求めることができます。しかし、サプライチェーンの性能を評価する上で充足されたデマンドの多寡を把握するためには売上高を合わせて考慮することが重要といえます。

みんなにとっての「良い」サプライチェーン

SCOR[®]で示される3つめのサプライチェーン評価の観点は、サプライチェーン自体の中長期的な持続可能性を中心的な関心事とするものです。これは複数のカスタマーやサプライヤーが相互に関連しながら形成する運命共同体としてサプライチェーンを捉

える点で前掲の2つの観点よりも一段俯瞰的な観点と言えます。この一種の生態系としてサプライチェーンをみなす概念はSupply Chain Ecosystem (SCE) とも呼ばれます⁴⁾。

冒頭のアマゾン社の例が情報技術の進化に誘発されたものであることに鑑みればSCEがマクロ外部環境の変化に影響を受ける性質を有することが読み取れます。また、反対にSCEの変化が社会・文化や経済といった別のマクロ外部環境の変化を誘発する側面があることも見て取れます。このような外部環境に対してオープンな性質を有するエコシステムの持続可能性を評価するためには、外部環境の変化からSCEが受ける影響（アウトサイドイン）と、SCEの活動が外部環境に影響を与える影響（インサイドアウト）の両方を含む「ダブルマテリアリティ⁵⁾」の観点からの検討が望まれます。SCOR[®]はこのようなSCEを取り巻く様々なマクロ外部環境を「社会」と「自然環境」の二層で捉えることを推奨しています。



以上のことから、SCOR[®]において示されているサプライチェーンの性能評価の考え方は「カスタマー」「サプライヤー」「エコシステム」をすべて視野に捉えた「全体的 (holistic)」なものであることがわかります。世界標準のSCMにおいては、世の中に創出・提供した価値が大きいほど「良い」サプライチェーンとして評価されるのです。

（連載第3回へ続く）

【参考文献】 URLは2024年11月30日時点

- 1) アマゾン社ウェブサイト（2024年7月30日）
<https://www.aboutamazon.com/news/retail/amazon-prime-same-day-delivery-speed-2024>
- 2) ASCM “SCOR-Digital Standard”
<https://scor.ascm.org/processes/introduction>
- 3) 行本顕「基礎から学べる！世界標準のSCM用語解説 第3回「S&OP」「ROIC」」Logistics Systems 2024年新年号
- 4) 山本圭一・水谷禎志・行本顕「基礎から学べる！世界標準のSCM教本」pp.16
- 5) GRI “Double materiality. The guiding principle for sustainability reporting”
<https://www.globalreporting.org/media/rz1jf4bz/gri-double-materiality-final.pdf>

[第3回]

サプライチェーンの「構造解析」

～サプライチェーンの「変革」を考える～

行本 顕 (ゆきもと けん)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 理事長 / IDP, CPIM-F, CSCP-F, CLTD-F

高井 慎平 (たかい しんぺい)

一般社団法人ASCM COMMUNITY JAPAN 調査研究委員 / SCOR-P, CPIM, CSCP, CLTD

サプライチェーンの「現在」と「未来」を描く

前回の記事では、サプライチェーンが生み出す価値は、多様なステークホルダーの視点から多角的に評価すべきであると述べました。また、サプライチェーンは外部環境の変化に影響を受けやすい動的なエコシステムであり、そのアウトプットは時間と共に変化します。したがって、性能評価の結果が望ましい場合はその再現性について、そうでない場合は異なる結果が得られる可能性について継続的に検討することが重要といえます。サプライチェーンの構造解析は、この検討を適切に行うための前提であり、価値創出の仕組みを把握するための活動です。今回は、SCOR®を用いたサプライチェーンの構造解析の考え方について解説します。

3+1レベルの解像度で構造を解析する

SCOR®プロセスモデルは、サプライチェーン計画・実行に関する諸活動について、3レベル（レベル1～3）の解像度で標準表現を用意しています¹⁾。このとき、上位のレベルへ向かうほど抽象度の高い表現が用いられます。標準表現があることで一意の表現を用いた構造解析が汎産業的に可能になる点もSCOR®の特徴として見逃せません²⁾。

サプライチェーンの計画・実行に関するSCOR®モデルにおいて最も抽象度の高いレベル1表現とし

て、「計画 (Plan, P)」「受注 (Order, O)」「調達 (Source, S)」「生産 (Transform, T)」「納入 (Fulfill, F)」「返品 (Return, R)」の6種類が用意されています³⁾。

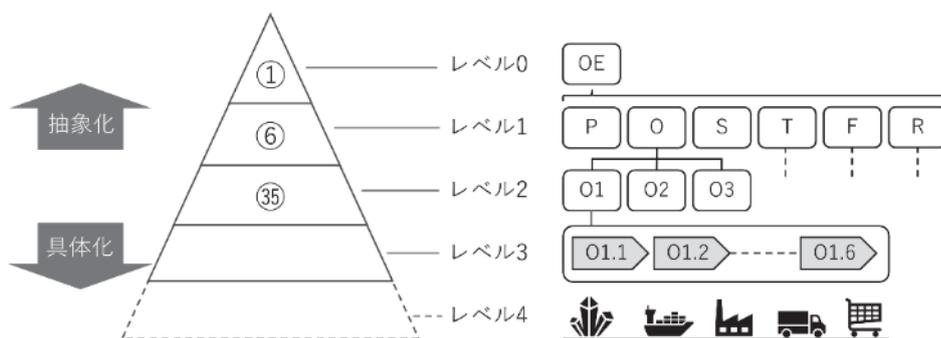
次いで抽象度の高いレベル2では、レベル1の各活動がそれぞれ、主体・客体の異同に着目する形で約35種類に細分化再整理されます。一例として、「受注 (O)」には、B2Cの受注 (O1)、B2Bの受注 (O2)、組織内の受注 (O3) の3種類のレベル2標準表現が用意されています。

レベル3では、レベル2の各活動の構成要素であるサブプロセスが、標準的な実行フローに沿って記述されます。なお、特定の産業に固有のプロセスに関する具体的な表現はレベル4として整理されます。このレベル4は現実の写像であるため、SCOR®のプロセス参照モデルには含まれない点に注意が必要です。

サプライチェーンの計画・実行に関する諸活動の上位概念である戦略的意思決定・設計に関するプロセスは「オーケストレーション (OE)」と呼ばれレベル0に位置づけられています (図表1)。

SCOR®標準表現による構造の抽象化と具体化

サプライチェーンの構造解析は、現状 (As-Is) を把握する活動であると同時に、目指すべき未来の



図表1 SCOR®プロセスモデルの階層構造

サプライチェーンの姿 (To-Be) を描く活動でもあります。両者のギャップの大きさは様ではありませんが、これを克服するための活動には、サプライチェーンの「変革」と呼ぶべきものが含まれます。

もともと、未来のサプライチェーンの構造を描く上で、必ずしも「正解」と言える内容が明らかではない点に注意を要します。たとえサプライチェーンの性能についての目標が明確であったとしても、それを実現し得るエコシステムのあり方は複数存在するでしょう。より適切な未来のサプライチェーン構造を描くためには、ある種の思考実験 (What-If) が不可欠です (図表2)。

SCOR®の標準表現は、サプライチェーンの現状把握・構造解析に用いられることである種の抽象化機能を担います。同時に、サプライチェーンを構成する個別具体的な活動群を思考実験 (What-If) に適した解像度へと調整する意義をもちます。また、輸送に関するプロセスモデルが手薄である点等についての指摘⁴⁾があるものの、あるべき未来のサプライチェーンの構造 (To-Be) を描く際のジェネリックな構成要素としても利用できるなど、経営戦略・事業計画レベルのサプライチェーン・マネジメント



図表2 SCOR®を用いたサプライチェーン解析・設計の概念図

(SCM) において有用なツールといえます。

(連載第4回に続く)

【参考文献】

- 1) ASCM “SCOR-DS”
<https://scor.ascm.org/processes/introduction>
- 2) Bruno Stefanutti “The SCOR DS model”
- 3) 行本顕・高井慎平・日岐敏仁「世界標準のSCM用語解説 第2回」ロジスティクスシステムズ2023年秋号
- 4) Torsten Becker “Improving the SCOR Model”

【補足資料】 SCOR®モデルレベル0～2に含まれる項目

レベル0	レベル1	レベル2
Orchestrate (OE)	OE1 Supply Chain Strategy	
	OE2 Business Rules	
	OE3 Performance and Continuous Improvement	
	OE4 Data, Information, and Technology	
	OE5 Human Resources	
	OE6 Contracts and Agreements	
	OE7 Network Design	
	OE8 Regulatory and Compliance	
	OE9 Risk	
	OE10 Environment, Social, and Governance	
	OE11 Enterprise Business Planning	
	OE12 Segmentation	
	OE13 Circular Supply Chain Management	
Plan (P)	P1 Plan Supply Chain	
	P2 Plan Order	
	P3 Plan Source	
	P4 Plan Transform	
	P5 Plan Fulfill	
	P6 Plan Return	
Order (O)	O1 Order B2C	
	O2 Order B2B	
	O3 Order Intra-Company	
Source (S)	S1 Strategic Source	
	S2 Direct Procure	
	S3 Indirect Procure	
	S4 Source Return	
Transform (T)	T1 Transform Product	
	T2 Transform Service	
	T3 Transform Maintenance, Repair, and Overhaul (MRO)	
Fulfill (F)	F1 Fulfill B2C	
	F2 Fulfill B2B	
	F3 Fulfill Intra-company	
Return (R)	R1 Return Product	
	R2 Return Service	
	R3 Return MRO	

*ASCМ公式資料を参考に筆者作成

集合開催(会場:東京都港区)

「超」入門!

戦略的サプライチェーン設計セミナー

戦略的なサプライチェーンの「設計」と「評価」の基礎を学ぶ

会場 公益社団法人日本ロジスティクスシステム協会 会議室 (東京都港区)
※オンラインでの配信は行いません。

- 企業における戦略部門・企画部門の担当者が、サプライチェーンを設計するために必要となる標準的な記述手法と、サプライチェーンを「財務効率」「有効性」「持続可能性」の観点から評価する手法を習得することを目指します。
- 各講義による「学び」とグループワークによる「気づき」の組み合わせにより学習を進めます。
- SCMについての本格的な学びの第一歩として、積極的なご参加をお待ちしております。

サプライチェーンは、多様な需要に応えることを目的として、複数の企業や人々が相互に関連しながら価値を形成・提供する、一種の「エコシステム」といえます。その一方で、これらの企業や人々がすべての情報を共有することはまれであり、サプライチェーンを構成する個々の企業は、不完全な情報を前提としつつ適切な行動を取ることが求められます。

本セミナーは、企業の戦略部門・企画部門に勤務される方を対象としてサプライチェーンの「設計」と「評価」の基礎を学んでいただくことを狙いとしています。本セミナーのプログラムは講義と演習で構成されており、これらを通じてサプライチェーン設計・評価の基礎知識習得と、実務上の課題設定のための観点習得を目指します。

サプライチェーンの「設計」においては、サプライチェーンを構成する個々の要素とそれらの相互関係を記述するための標準的な記述手法を学びます。また、サプライチェーンの「評価」においては、「財務効率」「有効性」「持続可能性」を認識するための標準的な手法を学びます。

(参加対象)
**製造業・流通業などにおける
戦略部門および企画部門
担当者など**

※事前に「超」入門!世界標準のSCMセミナーの受講、又は、「基礎から学べる」世界標準のSCM教本【日刊工業新聞社】の読了を推奨しておりますが、初学者の方でも問題なくご受講頂けます。

※推奨図書: ASCM ディクショナリー 第17版 (生産性出版)

セミナーカリキュラム

1 サプライチェーンの設計・評価「超」入門

- 1.1 サプライチェーンの「設計」とはどのような活動なのか**
- サプライチェーン設計において目指すべき姿について考える
 - 共通言語としての「世界標準のSCM」について
- 1.2 サプライチェーン設計のための手法**
- サプライチェーン設計の手法について
 - 標準的な「プロセス参照モデル」について

2 サプライチェーンを「記述」するための基礎知識

- 2.1 標準表現によるサプライチェーン記述方式を学ぶ**
- 標準表現1: サプライチェーンを構成する「要素」について
 - 標準表現2: サプライチェーンにおける意思決定の階層構造について
- 2.2 サプライチェーン参照枠組を用いた「構造解析」を学ぶ**
- サプライチェーン・ダイアグラム記述の基本1
 - サプライチェーン・ダイアグラム記述の基本2

3 サプライチェーンを「評価」するための基礎知識

- 3.1 サプライチェーン参照枠組を用いた「性能評価」を学ぶ**
- 財務効率の評価の基本
 - レジリエンス・持続可能性の評価の基本
- 3.2 総合演習**
- サプライチェーンの構造記述と問題発見
 - サプライチェーンの課題設定と再設計

※諸事情により、講義内容は変更される場合があります。※講義においてグループディスカッションを行います。

講師プロフィール

行本 顕 氏
YUKIMOTO KEN

1974年生まれ。APICS認定インストラクター (CPIM-F・CLTD-F・CSCP-F)、法学修士。銀行員を経て2003年より国内消費財メーカーに勤務。生産管理・海外調達を担当。2010年～2012年にかけて米国の大手消費財ディストリビューターに常駐、S&OPを担当。日本初のAPICS三科目認定インストラクターとして日本ロジスティクスシステム協会、日本生産性本部他での講演を中心にSCM普及活動を行っている。ストラテジックSCMコース第12期修了生。JILS先端ロジスティクス研究センター委員。JILSサプライチェーンマネジメント推進会議座長。著書に「基礎から学べる!世界標準のSCM教本」(日刊工業新聞社)「全図解メーカーの仕事」(ダイヤモンド社)他。JILS機関誌にて「SCOR®で学ぶ世界標準のサプライチェーン設計」連載中。

高井 慎平 氏
TAKAI SHIMPEI

1987年生まれ。SCOR-P, CPIM, CLTD, CSCP, MIT MicroMasters in SCM / in Principles of Manufacturing。2011年より国内医療機器メーカーに勤務。海外子会社向け受注出荷業務、生産・販売・在庫計画業務を担当。2016年～2020年にかけて米国販売子会社に駐在。需要分析、購買、在庫管理業務に従事。帰国後はサプライプランニング業務及びIBP (Integrated Business Planning) 導入プロジェクトに携わる。ストラテジックSCMコース第12期修了生。JILSサプライチェーンマネジメント推進会議メンバー。